特別講演

肺炎球菌性肺炎と急性中耳炎
── 動物感染モデルが示すもの ──（抄録）

紺　野　昌　俊
帝京大学名誉教授

小児の急性中耳炎の治療に際して，抗菌薬を投与することの是非についての論議は1985年代と大きく変わりつつあるというべきであろう．その理由は言うまでもなくPRSPあるいはBLNARといわれるペニシリン結合蛋白（PBP）遺伝子に変異を有する肺炎球菌あるいはインフルエンザ菌が関与する急性中耳炎が増加してきているからである．つまり，これらのPRSPやBLNARによる小児の急性中耳炎に対しては，もはや抗菌薬療法のみで治癒せしめることは難しく，言わば古典的な対症療法をも併用しなければ根治するに至らないという事態に立ち至っている．この際，ペニシリンを始めとする抗菌薬が無かった時代に遡って，当時，猛威を振るっていた肺炎球菌性肺炎，ことに大葉性肺炎が多発した時代の肺の病像を動物感染モデルで示しながら，それに現代の急性中耳炎を重ね合わせて，考察を加えて行きたい．加えて，PRSPやBLNARは小児の急性中耳炎のみならず，化膿性髄膜炎の起炎菌としても増加の傾向にある．これらの症例の多くは極めて劇症で，救命し得ても重篤な後遺症を残し，次の世代を担う小児であることを考慮に入れた際には，莫大な社会的損失に繋がる．これらの重篤な疾患の病像についても言及していきたい．